



訂正  
新編

女庭訓大倭囊

傍注  
訓  
女  
必  
府







Vertical columns of handwritten Japanese text in the upper left corner, likely a preface or commentary.



清水書局



類文書  
辨誤

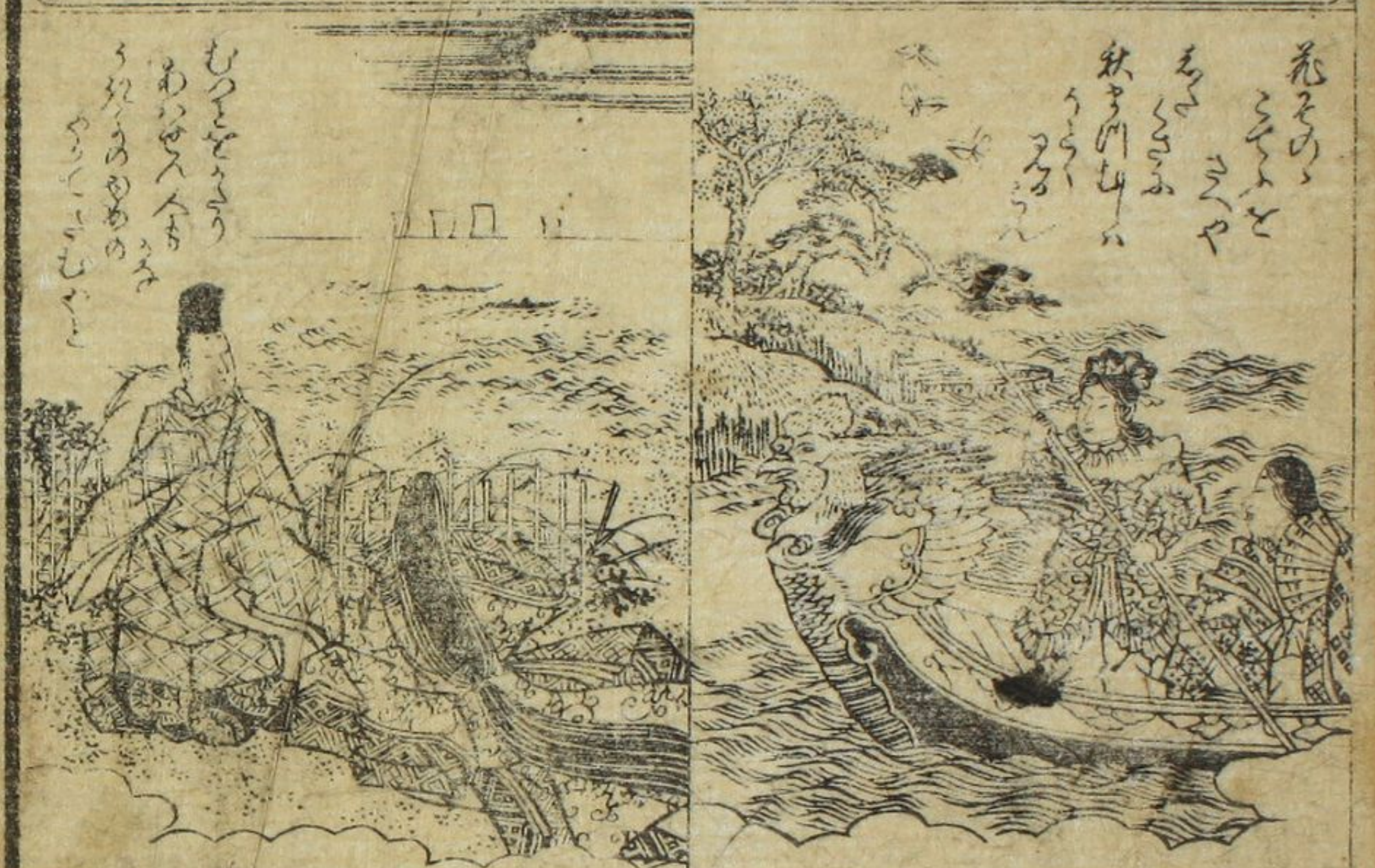
女庭訓人倭書全

子種房梓





四 季 源 氏 繪



花その  
くさくさと  
まはる  
秋の月  
うらや  
るる

むつと  
あはれ  
うらや  
るる



いろ  
あはれ  
かた  
つら  
の  
けり  
と  
の

か  
の  
あ  
の  
あ  
の  
あ  
の  
あ  
の

五節供畧説 正文辨誤



○元日の事 五節供の二月三日  
去月音 七月七日 九月九日と 月由日  
も 同ト 湯敷の なりありる日を用  
る 中 小正月の 七日と 七夜と 祝  
ひ 五節供の ことと する あり

女彦刺徳来

年 始 此 活 悦 る あり 是  
と とも 是 々 を 始 め だ たら せ け る  
先 元 三 乃 初 子 日 始 づ  
ら しく 着 殿 を 一 へ 彦 子  
小 松 を 引 け る 忍 ぶ 事 あり  
お 代 表 者 女 彦 刺 徳 来



あり是の二の教のそりひ言元日  
 年月日二の節にて殊木更切ある  
 祝目多しを舞伴の舞ありぬぬ  
 あり。往古ハ朝賀を極中より  
 小朝拜とて元日の堂上方のそり  
 け。是月ありて。年始の佳儀と  
 のべあり。

○正月七日の事。今世上ふま  
 濁り合ふりり七枝。ちこころ  
 あり。すこころ。すこころ。すこころ  
 と。美やて。君も。なり。あもくを  
 給。す。祝。庭。と。後。す。兒。樹。小。を。り  
 あり。祝。庭。と。後。す。兒。樹。小。を。り



大和のありありの言はるる  
 つらね姫君をまら離遊  
 心いれ多。三尺の古厨子  
 棚二よりひひたり。おひこれ  
 とう出あふ殿造り。と。あり  
 されや。侍。ま。を。さ。ぐ。り。け。し  
 永らるれ日。も。著。る。残

惜まよるんて。ひび。ひり。又  
 りれ。女。房。さ。も。若。木。れ。梅。の  
 盛。ある。若。木。の。花。を。踏。よ  
 して。揚。弓。を。と。儀。し。ん。  
 こ。ま。さ。た。は。目。ふ。の。け。さ。む。し。ら  
 ます。バ。業。あ。ま。り。お。思  
 ため。さ。ひ。あ。ま。り。その。あり



花菜の祝するものなり。はては十二  
 種の花菜の中はたわりの花菜の  
 製方ありて食するものなり。ある  
 由人々重なりて食す。野に出たて  
 引く花菜を挿しひく食す。花菜  
 する後より植て食す。花菜の  
 花菜も花菜の心見まはる。青馬  
 の花菜とて花菜青馬とひきて



人まはる。花菜の女どもも  
 具はれ。花菜を食す。中  
 待。花菜の心見まはる。青馬  
 対面の時。花菜の心見まはる。青馬  
 穴の心見まはる。青馬

花月。中。花菜の心見まはる。青馬

花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬  
 花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬  
 花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬  
 花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬



花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬  
 花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬  
 花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬  
 花菜の心見まはる。青馬の心見まはる。青馬



日あつてもよ上巳と移る月暮の所  
粧と今月北斗の星は灯籠をそ

まづらひてしまふ  
○子日の雛遊の事ハ年が経たば  
くらびまじりての巻もあはれもあつ  
たことわらふは

○袴巻の田子の祝儀をめぐり  
と女もあつた巻をめぐりあつて  
祝儀をめぐりあつた巻をめぐり  
らば十葉を載て巻をめぐりあつ  
女の福袋のうもあつた巻をめぐり  
めて腰あつた巻をめぐりあつて  
〜巻をめぐりあつた巻をめぐり  
又三日雛祭をめぐりあつた巻をめぐり



〜とこの夜の騒物人形の雛遊  
雛遊ひの本偶のひひの混〜  
〜は異國の三月三日ひひの遊あつた  
〜は唐の伝りわりの雛遊あつた  
あつた如くひひのあつたひひの  
女児のあつたひひのあつたひひの  
ひひのあつたひひのあつたひひの  
○草履と遠くとも異國前舞

「妹脊のかきこひさる〜  
ては。姑母法あつたのあつた事  
親の如く〜子成志あつたを  
らにたつた〜。まは  
万乃他法あつたで雛何あつたをひさ  
〜さるるあつた〜さるる  
安後えあつたひひの女の道

〜と物別〜新後あつたを  
空の〜。産あつたの〜  
姑美あつた〜重あつた〜長果あつた〜  
野色あつたの雲あつたも妹あつた〜  
前出あつたるる菜あつたもみ〜  
〜か〜。かう乃殿あつたの  
〜も成法あつた〜義笑あつたの



どの地のお儀の本物百うづりしよ  
 への三麻綿をて用ぬ今の運と  
 ひららるる

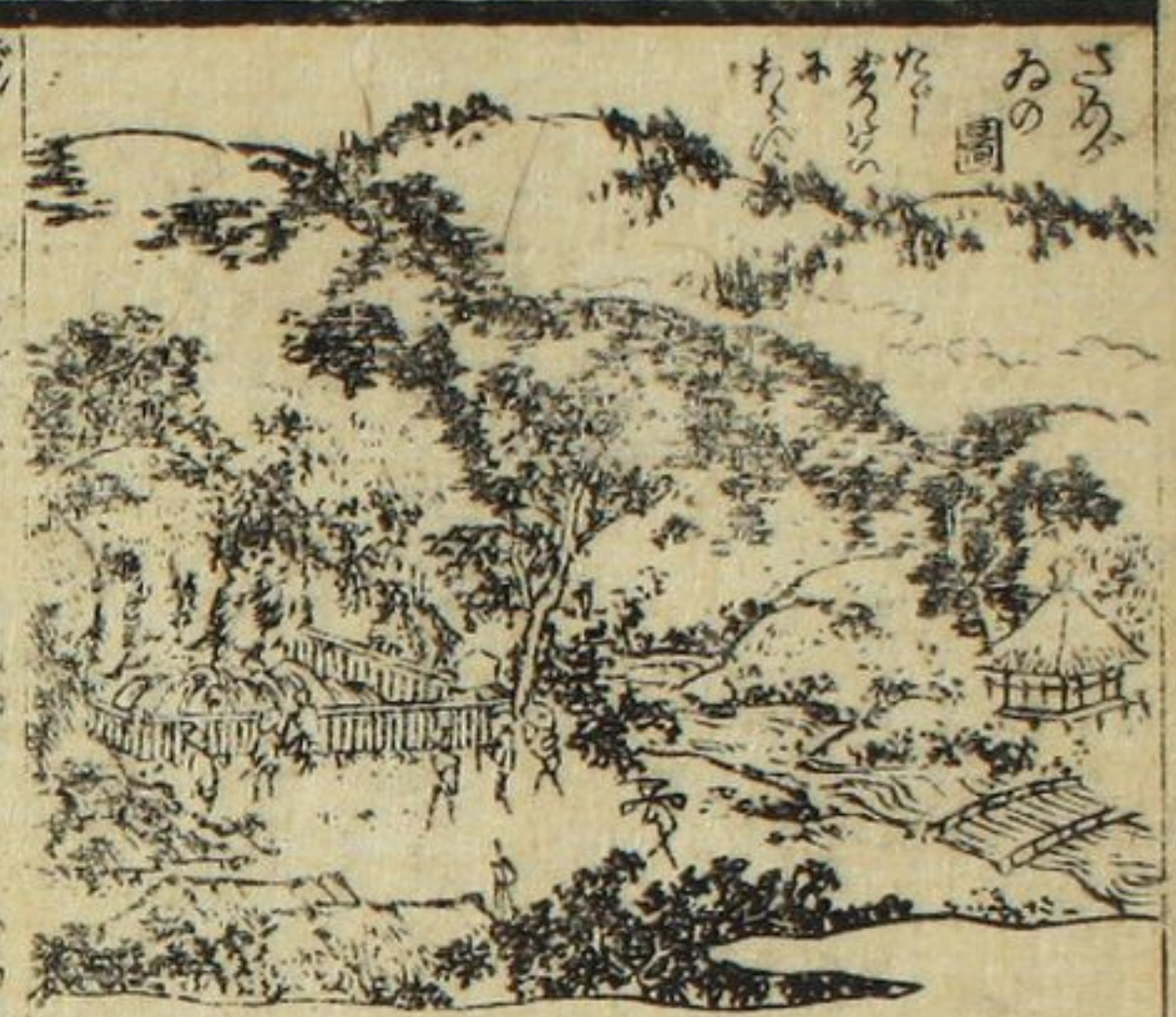


祝せりの序しん乃いとき  
 花の影多あてられを  
 かくらげちやういんせ  
 賀乃  
 いそぎいそぎいそぎ  
 玉待り揚らひ僅ら  
 本望れいりおてい  
 びせ

○此女庭前三月の返事ふ京と  
 ち英儀國一軒の通書名をよすは  
 わりいりてもよるまき及ふは  
 中へ暇を井の清水のる西行法師の  
 撰集抄でいづくに室仲美叙もく  
 巖の端をゆりてそよより漏れ  
 よとあまのここれいをせられ  
 ぐ井の清水の清水はふまうて  
 日本書紀の同國伊弉心の子孫の妻  
 ふゆせてふいみこむよかふうと  
 け清水の清水は清水の清水  
 より離れ井の清水をいりて  
 せりたれうる回路あり

の里物小あそびうらな  
 振うて極うん事よと  
 き者ども是をまうら  
 いそいそいそいそ  
 今もいそいそいそ  
 海にいそいそいそ  
 五月五日の事けいふ  
 孟春五日  
 侍従





あつこく今宵は神宮大御所さま  
 宗日親馬の神宮あり武徳殿の  
 猪村の面影のふべし洛東の暮の  
 神社ももき馬あり高瀬の橋ふ  
 青のこも此洋のく高瀬の香も  
 よく茶ののりも形もあまのり。

中法なかほつのさざめ

あまのさざめはむの援何  
 くれと打うつらむは物  
 途いよ成なりしり海う山やま残  
 海うさくたがふさくさくを  
 なさのふとさめとも路みちり  
 路みちをぬるり空そら輝あめくさ

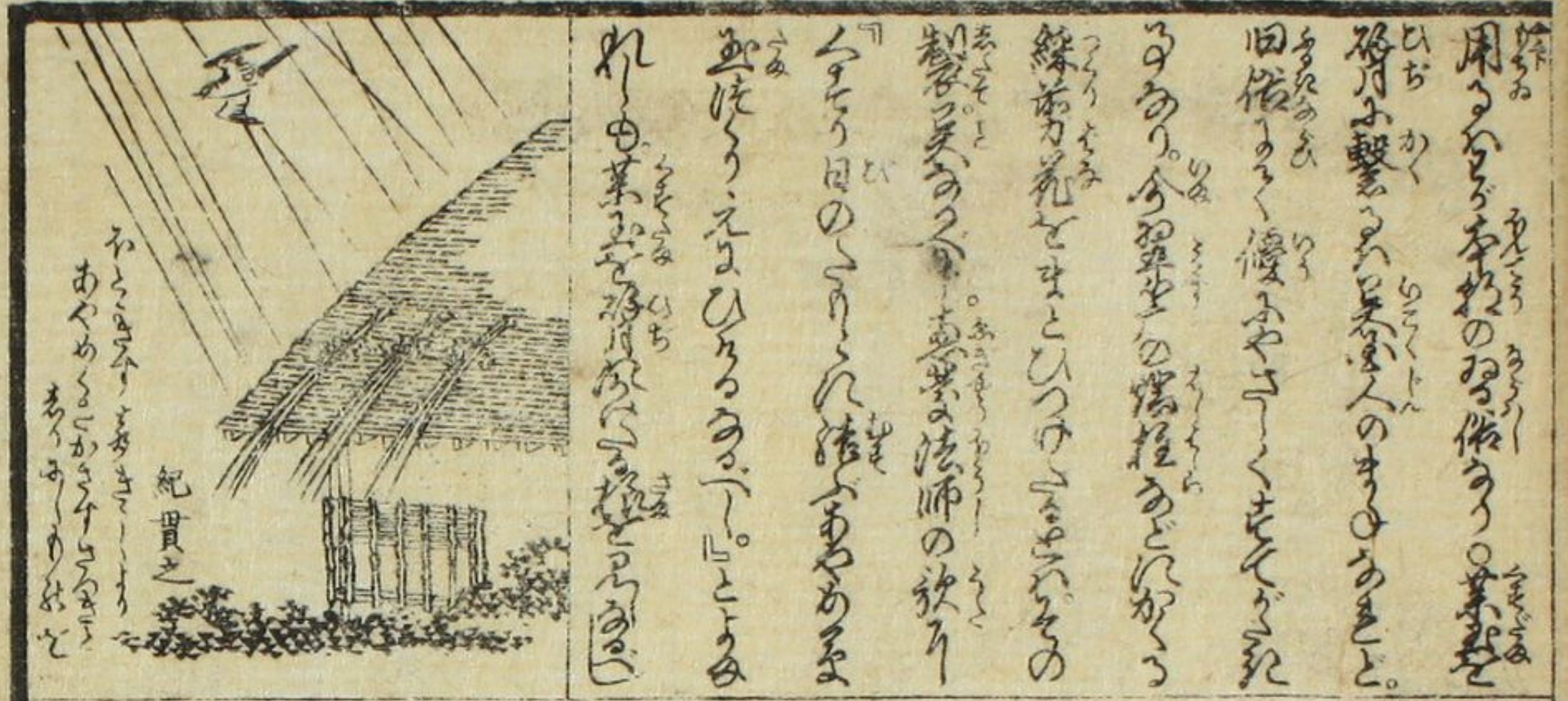
あつこく今宵は神宮大御所さま  
 宗日親馬の神宮あり武徳殿の  
 猪村の面影のふべし洛東の暮の  
 神社ももき馬あり高瀬の橋ふ  
 青のこも此洋のく高瀬の香も  
 よく茶ののりも形もあまのり。



あつこく今宵は神宮大御所さま  
 宗日親馬の神宮あり武徳殿の  
 猪村の面影のふべし洛東の暮の  
 神社ももき馬あり高瀬の橋ふ  
 青のこも此洋のく高瀬の香も  
 よく茶ののりも形もあまのり。

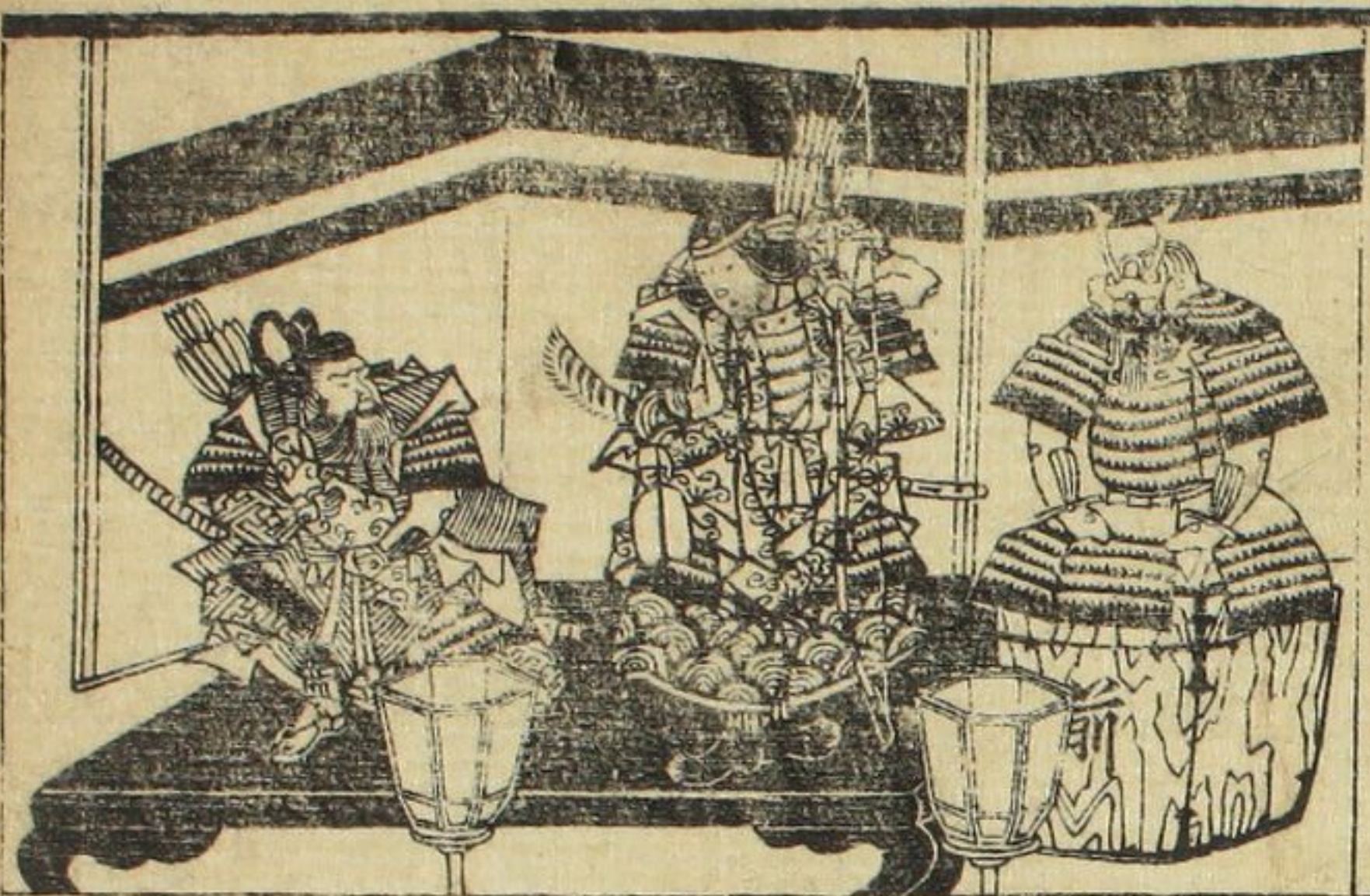
あつこく今宵は神宮大御所さま  
 宗日親馬の神宮あり武徳殿の  
 猪村の面影のふべし洛東の暮の  
 神社ももき馬あり高瀬の橋ふ  
 青のこも此洋のく高瀬の香も  
 よく茶ののりも形もあまのり。





用をかねて本邦の習俗をうらめしき  
 俗月小賢をいふは東山のまのまの  
 田舎のくせなやうなまのまの  
 子あり。今習生の習俗をうらめし  
 線筆花をまといひつゝまのまの  
 習俗をうらめしき。東山の法師の秋  
 今まの日のくせな法をまのまの  
 画はくうえまひなるまのまの。まのまの  
 れ。由業をうらめしき。まのまの

わらわ。され。東山のまのまの  
 人強うか。お曝夕映乃  
 次お祈。白まのまの。回公  
 交の橋。刻子竹筒あまの  
 ら。わらわ。まのまの。いす  
 後。小。硯。經。冊。を。まのまの  
 せ。乃。つ。く。の。究。賢



此日甲曹とむらう。戦と軍陣の  
 まのまの。まのまの。まのまの  
 右側。ら。い。何。一。番。林。縁。起。まのまの  
 る。わ。れ。い。ま。の。まのまの

如月廿三日  
 小少将殿  
 紀伴  
 ら。れ。まのまの。まのまの。思ひ  
 う。まのまの。まのまの。おまのまの  
 程。まのまの。まのまの。今。の。時  
 う。ら。花。まのまの。に。まのまの





○七月七日の事  
 女部供のつらぬも。三月の糸供のり昔の室のあはれ七月七日を才と。昔七日九日と改す。周播司より供済をむ。けい入の糸供とほよ。糸供のまねのて製するの。今上紫野いとの

電おはをら。东风吹るも  
 和らるるまももそよよい  
 を新し。催されわ  
 けよりいそよく花咲ける  
 まん。又是白あくあまんと  
 めくを。あるれ風もんえ  
 あれたるりまそくく行時

紫野のつらぬも。三月の糸供のり昔の室のあはれ七月七日を才と。昔七日九日と改す。周播司より供済をむ。けい入の糸供とほよ。糸供のまねのて製するの。今上紫野いとの

念死後をせられ信を  
 以て度より強いのま  
 花り身を抛る人々  
 硫るまをどいさあひま  
 屋かひよりをん  
 さうせく。様。の。の。の。の。  
 震心吹折乃あり物る





願と実説するまをのりあふり  
 ○七夕の星一年ふ一夜飲  
 命するといふと異はまもりて田  
 倉作若ぬもあれた一言の  
 戯より起るるそのあつと  
 のむしと桂陽城といふまふり  
 武丁といふ若あり仙術を學ぶか

ある時ふま某ふのあふり七月七日  
 天の織女星を河を渡りあふり  
 仙術を學ぶ若の守宮ふ還りて  
 集まれば我のあふりて人あは住む  
 汝も別へてといふ身問織女星  
 川を渡りて何るをういふふぞ  
 武丁云津牛里の祈(緒)り  
 あふりて云く明日武丁のういふ  
 これより織女星を牛里とて七日  
 一夜を待て通ひあふりて世れい  
 けえむいふも待るる秋もも候  
 といふ織女といふ名はあふりて女を  
 りあふりてあふりてあふりて候  
 といふ宛風流あふりてあふりて

かの若くころりよ。用意  
 紋いざなの若わかふいひあふりて

衣きぬあふりて女むすめ音ね 小こ少せう若わか

紀伊きいとあ

流ながあふりてのり

河任かに國くにの後のち又また比ひかあふりて  
 若わかくあふりて若わかの信しんを若わか

の乃のままくく若わかあふりて若わかのそ  
 きく名な取と多たく若わかあふりて若わか  
 河館かかんのうちむら若わかあふりて若わか  
 若わかのそむら若わかあふりて若わか  
 えあふりて若わかあふりて若わかの若わか  
 若わかあふりて若わかあふりて若わか  
 殿どのより通とほり若わかあふりて若わか





七月七日を過ぎぬのころ  
花前とむすのころ

三日月のしりしり田舎家ごめ  
 茅葺木末垣をまわすころ  
 廣き庭に花もみ泉もあ乃  
 立石假山の方よりせられたる  
 水の陰は浅く清き水と  
 羨しく國の控ふく昔の  
 つつと小民の電へ旅ひ



のひらきとぞありけりる平兼盛  
 の二里の院を虚使ありこれ  
 行くよふきくる秋家集あり  
 大なるこころをいふ  
 名ぬきうらやまのいふ  
 のまのいふ

延喜天曆の聖は代へ  
 村上天皇  
 醍醐天皇  
 目かきたるあめよ  
 うら虎突  
 弥生み日  
 束のつぼ  
 光の上  
 ちのちとけは前さな



○九月九日の事。天子紫雲殿  
 小出所ありて。昔の御記に昔の  
 必交人と召集て菊の花に  
 宴を賜ひ給へり。昔の御記に  
 ○さて此の世にこれの如き縁を  
 花小波は花の香を添ふより  
 て貴族たる之を答ふべきは花の  
 代りし。昔の御記に昔の御記に  
 昔の御記に昔の御記に昔の御記に  
 九日菊はさうさうに色を添は  
 りのさそきてこれ服の上の  
 のさうさうにさうさうに  
 すてさうさうのさうさうと  
 まゝ紫雲殿の菊の中あり

依れどく習をぬ縁り門  
 出やし流る依のさうさうな  
 かまの別のやうに思秋まひひ  
 女郎花の色小波つる粟田  
 山通照が世成のぐれ花  
 頂山岩倉を打とて山科  
 の鏡山あはれれ帝の御後を

むらた袖ぬれ花のあは  
 小波代わがらん  
 ○十月まふ縁を内裏する  
 不の御記に昔の御記に昔の御記に  
 某より丹波とあやまらぬ  
 ○十月の返る小波色のあ  
 あり御記に昔の御記に昔の御記に  
 御中さうさうにさうさうに  
 もむらたさうさうにさうさうに  
 らうさうにさうさうにさうさうに  
 赤たいろをさうさうにさうさうに  
 とありさうさうにさうさうに  
 色さうさうにさうさうにさうさうに  
 なるれ白はるさうさうにさうさうに

相とて向ふさうさうさうさう  
 小波はる遠坂さうさうさう  
 冥路まて名あはかさうさう  
 き母は理を思ひさうさう  
 さうさう大津る乃打出の候を  
 さうさうのハ粟津野ふさうさう  
 勢田の長橋さうさうさう



富士は言様よかよふなる。よ上ればさるる  
しと野路の玉川越ぬればさるるあけきこと  
ちよと名付初るむ昔さるるゆうききさるる  
保るる形く。睡海の河津をうらけく。あ  
系るるあてびうしより。雲るるあてせ乃かかん山  
年ち接れど花るるは森蒲生野色く  
眺中しう。冬籠の山ある。不知也川いさ

あつめたるるくと。醒井あてるる。び井あ  
大和国山科古松室といふ。おは仲算大  
徳と云。智者の回法教あるともあひあつ  
まへ修行おゆさたるる。阿大日照るそ  
万民のびきき。水さるるあてさるるさるる  
仲算あてぬき。山は端を切さるる  
水大さるる涌出たり。まより。四六日さるる



浮流貴所もは不<sup>し</sup>成<sup>す</sup>く我も結縁<sup>けつえん</sup>を  
とく又側<sup>そば</sup>を切<sup>き</sup>つひに流<sup>なが</sup>る清<sup>きよ</sup>水<sup>みづ</sup>流<sup>なが</sup>る  
出<sup>い</sup>る。小<sup>こ</sup>碓<sup>すい</sup>井<sup>い</sup>といふも是<sup>これ</sup>ありと。西<sup>にし</sup>行<sup>ゆ</sup>く人<sup>ひと</sup>  
乃<sup>すなは</sup>撰<sup>せん</sup>集<sup>しゅう</sup>抄<sup>しやう</sup>の記<sup>き</sup>せる也<sup>なり</sup>。字<sup>あざな</sup>よりいへる小<sup>こ</sup>  
公<sup>こう</sup>勝<sup>しょう</sup>つらと事<sup>こと</sup>に流<sup>なが</sup>る人<sup>ひと</sup>を  
ける。程<sup>ほど</sup>多く英<sup>えい</sup>渚<sup>しよ</sup>の中<sup>なか</sup>にえまはる  
不<sup>ふ</sup>波<sup>は</sup>の突<sup>つ</sup>登<sup>のぼ</sup>れ板<sup>いた</sup>屋<sup>や</sup>も名<sup>な</sup>の計<sup>かへり</sup>の跡<sup>あと</sup>え

え。館<sup>たて</sup>といふ名<sup>な</sup>も古<sup>ふる</sup>郷<sup>きやう</sup>  
人と諸<sup>しよ</sup>共<sup>ども</sup>にえまはる。ひのたがれ物<sup>もの</sup>  
日<sup>ひ</sup>小<sup>こ</sup>民<sup>たみ</sup>乃<sup>すなは</sup>泊<sup>とまり</sup>を定<sup>さだ</sup>め。関<sup>せき</sup>の藤<sup>ふじ</sup>川<sup>がは</sup>をえす。て  
君<sup>きみ</sup>小<sup>こ</sup>法<sup>ぽう</sup>なる事<sup>こと</sup>をの身<sup>み</sup>に觸<sup>ふ</sup>る。遊<sup>あそ</sup>遊<sup>ぶ</sup>  
おひらりな方<sup>かた</sup>はありとも。家<sup>いえ</sup>をえまはる  
人<sup>ひと</sup>おあつたれ。九<sup>く</sup>重<sup>じゆう</sup>のうちをえまはる。業<sup>わざ</sup>なり  
いへる。ひのたがれ物<sup>もの</sup>をえまはる。業<sup>わざ</sup>なり



不 ありん  
孝老の目

つみのちめ

孝の残るもの

孝のまつりごとありて終るを終廢ま  
る我身一終ふ中にもおと存する事  
方を脩るにあり身を成さむる事ハムを  
正しく行ふおのり式にそむる事ハ  
かけぬきん業能小勝る事ハ女の方と

孝老の番席上の書学好んこまわは  
但主人の女の礼を論ト九嬖の女の学成の  
ことなるなどいふて成あつて親もはる君  
ふつうやまらるる處に男子文字ありて是  
は孝あり一終る及ぶぬ事ありて  
ん中へく朝夕朝夕系を由同の  
されらる。廣大の以慈悲ハおまひ



とそまのりは究のりこ

卯月十日

右史

さいきやうごのり

此大務も公私に毎日のるこる平定よん

目へ一 徒然あるおるいやめつし

由消息のちのびる感へ入りし女法

まのひらるのそしおき中よもあつとほる

るを人事に公海めえ。まのち音のま

ふふけけのしよえの口徳とえはをあるでん

あくの。それの婦徳婦容婦言婦功よえの物ふ

婦徳と申の柔順貞節と申るひふ女の色

そむる申のあはし徳よえの。あはし徳

男おるえぬやうに。考み媒嫁ありて父母

若人許されし。男あるをづしるひあ



法ほうよる。相男あいにんを家いへのぬるようららくく。  
今いま疑うたがひを交まじぬやうう方かたせののをを真まこと言ことと  
し。心こころのゆゆまぬ事こと作つくの如ごとくくよよらら程ほどと  
ああららふふににままるるあり。夜よる寝ね不ふ致ち不ふある  
とといいははるる。たたらら法ほうくくししきき人ひとととははららるる。  
ままがが人ひとをを侮あはれれ。又また是こゝ男をとこよよらら致ちううけけられ  
おおままささるるゆゆゑゑ義ぎ理りとといいははるるたたららくくたたを

昔むかしよりより家いへ又またとと主あま君みことととおおののひひややららたたるる  
ぐぐとと柔あや順とんとといいひひ。又またののひひもも身み持もちをを  
義ぎりり者ものくくるるににままるる。殊こととといいははるる大おほ事ことににままるる  
ぬぬ極きよくりりとと難がたいいとといいははるる水みづのの如ごとくく方かたををののりりとと  
あり。水みづのの圓まとといいははるる入いるる丸たまごくく如ごとくく。四よ方かた  
あるある義ぎりり入いるるににままるる方かたありありとといいははるる物ものとといいははるる  
ららとといいははるる順とんとといいははるる又また様さまららとといいははるるとといいははるる



何しむかひもむしる事、眞言にわれが女たふらむ  
あつた男乃不義なるもわらむむしる者、又後如く  
女もよのまろく。心はゆがぬ、廉はまじく人り  
おそれらる。はて裁縫よく物を書。そ外能  
あつた、飾の中に文字何るが如く形。婦容  
と申はる、此飾あり。位より、安福ふも、  
鈴子、依ひお應へ出らるが、よのこゝろ、

不置あるも、理よ、かき、つ、つ、  
時、およ、ある、り、え、ん、物、言、と、物、い、ふ、り、  
お、い、く、人、の、心、を、お、ん、え、ぬ、り、の、え、い、お、い、を、  
の、か、こ、あ、い、と、い、く、者、お、い、り、え、ん、は、  
る、い、え、ん、よ、い、え、ぬ、が、優、り、の、詞、多、き、若、い、  
る、も、お、い、く、の、物、い、を、ぬ、人、を、心、根、を、  
解、く、も、お、い、く、も、有、り、の、え、ん、詞、ひ、



まて人を助けくわがさる名を名又一言  
多う人成例して人な娘まき怒を殺すことい  
婦功え琴をひき物に給をうき物を深  
るまは就田婚の方ら流りの成織るの棚撮の  
手あもかまひ。まら怒ひあまそふ筆母も  
一終くぬ。いふまきうけられぬ。物毎よ義に  
叶ひ禮よ南りり。物又君よ奉仕る作

事も。親は法うふひとるさ能ふおのけ  
られつ。持れをうけしと君よ法のみまつ  
より上ま好く。昔堯とや。元。その人  
が。沖子あま。かそ。内れとも。天下の  
万民をなまけまの。ん。赤く親を孝  
行あるの法よてありと。虞舜とて田を耕  
わる者よ。元。下。その親よ孝行ありと



これより天下に成徳するものあり。神佛を敬むも  
親をうやむふ礼をのりて、洋にゆく。兄弟を  
ひつび友達に交るも、親に侍る礼をうけしむ  
致し、それより厚く、孝を為すのかさう、先  
あつてかまひぬるもの、家親を敬むる  
より、人の親を敬むるより、孝事より  
女と末と、我兄弟より、孝く、他人の兄

身に厚く、親切あるは、女に成徳を末を先  
とむるもの。又君父の他人の海に、名を  
養ふる人も、親孝ののりたる人。むじり、を  
よ愛し、今うき世に、いかに、主君も、ま  
ことの忠臣と、なれど、人として、有るもの、穴  
卯月十日  
多しよの局  
宰相



端午の古祝として、飾粽、午把、古者之種、皆  
西宮若君梅の業、玉系、若君是を、得月おかれ  
を、悪鬼を拂ふと、本文も、さう、め、ら、や、い、と、電  
夜例、お思、ま、さ、せ、ら、今日、未、初、小、馬、場、殿、と、そ  
男、在、集、り、騎、射、を、催、し、こ、の、の、所、藤、乃  
う、ち、よ、り、ん、透、さ、れ、ま、の、波、お、さ、り、や、う、く  
江、堅、有、ぐ、く、ひ、り、結、り、く、又、婿、娘、若、縁

は、り、上、の、作、有、れ、ま、の、目、出、交、は、ひ、り、く  
世、月、小、祝、言、の、ま、さ、ら、ま、の、流、を、月、の、其、用  
意、の、心、跡、も、あ、り、は、装、束、以、平、信、物、漆、の、お、  
を、も、髻、も、上、を、お、方、の、流、あ、で、山、厨、子、並、棚  
か、の、飾、物、古、指、南、斗、夜、の、ま、さ、ら、ま、の、流、を、  
梅、白、月、の、日、中、形、の、り、め、え、な、り、  
祀、後、束、女、の、の、  
源、因、竹



今も此世祝と仰れ色も送給めいひり  
客入のこ  
まらうと等入りつら次めは是事送給りか  
練と白乳子物一重贈進は祝儀計みね  
馬場屋え騎射より切子進るまを  
たの切仰とみりる連て系りつら  
右よまら完やりの由目と及おひりり  
お目の子子振神代より妹脊のかこひて

おれは女内次まのじいん丸月も秋の果  
嫁妻は系を様ひとれよりお方は沙汰  
ことありし沖お様かとの事は送る所  
谷の信給りりり。扱又男も女も  
る化法は伴勢殿のやとやの公方家  
お人まの是とおひらお武田やう佐竹  
小笠原流とて二家も武家の用中は討



棚の床に右の並かざり格併勢夜かきり  
 上段の太舟小方板示礎箱香管沈箱  
 香盒香筋籠策箱中段の戸棚の交籠  
 藉きを入り段の棚の封子等其差葉物  
 入灰押火取下段の棚の双紙かを入り此後  
 棚の又差葉も小角木にても並の右の道々  
 乃月をえん計りひのた籠の並の並の棚を

床の左の並の飾格上段のこひを中法  
 宮園黒箱秋夜杯わつし紙二重目小片  
 小角かひ付等つしし差葉合の差葉  
 乃懸棚の小角木下此等の兵倍子差葉身置  
 角を洗右の月を合て置差夜籠の並り  
 清に敷れ方小角木並其上の山向直物  
 七角の床の左の格長具相違棚の飾上



法皇の双帝下はるる御世に月日は又南無  
命の家への心は御事にはくはるるの故に  
そく今教つる御の御書付の御書  
必く此の御人の御見世に御書に御書  
あはれ

皇月六日

う 祢め

保まい一後ら

みま月へ祢國沖雲會とえ世乃沖ゆ

そく作き諸乃御後の明神とそ。山城一國の  
熱社をえかちちをば尤崇まじむる成よ其  
れを御まかちては只押並く祢を會せり  
やまひの御れ御の御書に御書に御書  
たいやうの御書に御書に御書に御書  
あめ鴨河乃境に御書に御書に御書  
そくも御書に御書に御書に御書



あはれを見をまゝとせよ。後思ひくははしき  
し。海は是るが。あかか。こ

林鐘二日

大貳

辨乃がけらる

そは。後。ふも。わ。て。中。絶。ひ。ゆ。る。さ。る。の。と。好。く  
あ。り。く。あ。つ。る。ふ。物。出。は。せ。残。を。こ。標。を。し  
あ。り。く。何。方。あ。も。と。好。く。め。で。こ。の。結。を。を。死

祇園會ふあり。物る人々所をたて。田舎  
より。も。集。集。ふ。は。り。の。作。古。人。の。あ。り。く。あ。り  
と。る。ん。は。い。は。れ。神。を。若。日。中。に。あ。り。ひ。さ。あ。り  
さ。り。し。荒。振。神。を。て。後。ら。せ。あ。ひ。ひ。さ。五。十。六。代  
清。和。天皇。自。親。十。年。説。宣。の。り。有。り。夫。下。泰  
平。此。の。り。と。あ。る。と。有。り。山。城。國。小。碓。氷。を  
好。ひ。よ。る。夫。下。に。疫。癘。の。災。冠。は。神。代。と。此



神かみ南みなみ海うみに沙すな碯いし瓦わ祀まつり主ぬし乃すなは嫁よめと后ごおせんとて  
 よむひよいしごままし時。後そ民みん将あ来らが家いに宿やどり  
 給たまひしぬ。あらうとを坐まさし。粟あれは依よりをなりま  
 其その後のち入いりて祀まつぐ。八は子こに神かみを具ぐして。後そ民みん  
 が家いに到いたりて宿やどる。一いの宿やどを貸かつる。思おもひを報むか  
 さんめに來きりし。茅ちの竊こを祀まつぐ。後そ民みん將あ来ら  
 此この子こ孫そんありしと。疫えき癘れんの殺ころすのがすべと

誓ちかしめぬらり。今いま小こ玉たまを四よ條じょう系けい極ごくを粟あの供く  
 御ごをなり。後そ民みん將あ来ら由よし緒つらとて。脊せ属ぞく  
 わらが八は方ほうに六む百ひゃく五ご十じゅうに神かみありし。次つぎ小こ玉たま  
 約やく般ぱんと。操さう由よし作たくれ。ことをとして思おもひをなりま  
 美みをとして。思おもひをなりま。思おもひをなりま。思おもひをなりま  
 美みをとして。思おもひをなりま。思おもひをなりま。思おもひをなりま

丙午月二日

年



大哉乃らるる海なる

秋の川に六つ子の雲霞風の音にあらう船が乃  
きりもあらう。あれた女もありの振うも倭もを  
七夕年。乞巧奠とて星成るあは女はあらうと  
待て乞ぬまき上の子ふねる事。その船庭を清  
免茅の葉を鋪く。瓜を子向琴二張をねく。  
一張の琴を柱と待て。張を呂ふと並たひひよ

清あを今星は新を福しる。又竹を七夕ふ  
さうを庭をまき。左右よ糸を七筋法かけく。  
秋の川に六つ子の雲霞風の音にあらう船が乃  
千歳葉もく合をさるるあはれた女もを  
織女の袖も匂ひて我せえと。あはれた女もを  
我程もくすも自も。七人乃掃もさるる魂を  
る事。いのねるかうりはらねる。海なるらむ。



さうぬき法師あどぬ尋問をわき頼ととも  
若れた者の死をさす頼ととも人忠もつんも尾籠  
か多くさ行い。ましめされりうけ頼を  
夕月夜れやどたづひりん。よ頼づ甲述ぐ  
い。何あしこ

文月朔日

東極庵

正親町

残暑の秋やも見えぬまぬ。あさひ  
孫のりき。吳あるは。作らま。只。家。居。の。つ。ま。い。く  
あだと。旅。が。う。ま。え。侍。ん。歳。年。か。一。秋。也。  
い。と。信。ま。義。棚。操。忠。賢。み。あ。え。ま。ん。初。を  
し。世。も。う。た。人。を。め。ら。せ。る。所。を。り。く。め。や。さ。れ  
る。の。は。く。い。は。そ。の。か。つ。介。五。百。歳。と。さ。か。る。事。あり  
ち。さ。侍。ぞ。れ。頼。と。も。ひ。う。さ。や。侍。ら。る。哉







うの極み如くあり。昔の正月乃晦日に  
又たまつりて弓弦葉齒菜を爰に  
お供物を供へて。今も東家果ての  
有る類とあり。先づ成るやまひ先祖  
をまつるも極木の極成書かてて  
從對面のと起りけむ極くは  
極

多月朔日

極

お下す所とあり

八朔乃清祝儀とて。由さるる極  
所極つ初外番が中満を極くは  
し九變ぬ秋はめて。極をのりて  
極く新しく造る。極の用さるも  
廣き極面。極極とて。極の極  
をこれとて。極の極とて。極の極とて。











貴法又あどいぬ度の秋の佛も秋毎  
 女長月九日菊をよとを申しはるる日  
 咲も稀よみゆ名もや雲の上人あが法不  
 める菊はよふ綿をよろく赤く笑を紫  
 うばあどいをあてをねふと極く法もと法と  
 菊をよと菊乃きむらひはるる者りこ  
 せし前裁り今日も咲出さる哉

先つ〜〜〜思ひ〜佛も法を向らん  
 りやと一枝送り〜替もきふ葉は酒を周  
 られり。いの成はれさむらよやあ〜く  
 若白とや筆も。しとれめ得たるりよや  
 けのまゝ女も不審かつら事よ。又東十二  
 日ち度申とるめ。大宮乃月よ男も女も  
 さいよ海りあり。終夜の子姫事りらゆら



きねえ子の日もちうしるひ。清心なるるる  
結ぶは秋の清粥を下さぬ心せいで  
たさのり。たまにいつれも神仏を  
考にねえ。あつてやらん女を乃ねひ  
さくみふさるりや。あつて  
半残うけ給へ。思ひりし

長月九日

小向

大阿闍梨の法

作給う。八講の抄を。正業の有難き  
結縁を女人の佛よあまのいそれ。提婆  
品よいう。あつて。信じてあつて。珠  
した菊の初花を。賜て。先佛  
手向て。あつて。九日業を  
くねえ。あつて。あつて。費長房といふ



凡人の汝南此植業と云人よ若ていそく  
 九日母家おつごひ有る。菜菔乃露を  
 漉く。特子か多。山りをのまて菊酒を吞ハ  
 其禍消ぬ。といふ。教めよ。いそく  
 われは。其方ち法。く。好く。て。家。に。あり  
 庭津島大羊子。と。皆。死。く。り。是。より  
 は。ま。る。と。や。ま。き。又。其。供。とい。ふ。り。末。乃

世乃人よく志す。正月七日。二月三日。六  
 月七日。七月七日。九月九日。月數。く。お。み  
 ときの日を祝。り。い。所。ま。も。陽。乃。を。す。此。月  
 日。ま。く。い。次。お。廣。申。此。り。佛。法。よ。ん。や。佛  
 と。や。り。の。世。中。り。大。松。さ。た。い。し。い。本  
 号。の。青。面。金。剛。ま。く。い。是。を。業。師。乃  
 十二神の。第一。の。ま。く。い。十二神。と。や。り。の。業



師の愛化<sup>えんげ</sup>の<sup>あ</sup>中尊<sup>ちゆうそん</sup>の業<sup>ぎふ</sup>河<sup>か</sup>回<sup>かい</sup>方<sup>ほう</sup>に<sup>ん</sup>之<sup>ん</sup>  
十二<sup>じふに</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>あ</sup>久<sup>く</sup>地<sup>ち</sup>の<sup>あ</sup>間<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る<sup>せ</sup>物<sup>もの</sup>  
其<sup>その</sup>本<sup>もと</sup>まで<sup>ま</sup>業<sup>ぎふ</sup>師<sup>し</sup>如<sup>に</sup>來<sup>らい</sup>の<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>め<sup>め</sup>を<sup>み</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>  
こ<sup>こ</sup>の<sup>あ</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>せ<sup>せ</sup>成<sup>じやう</sup>法<sup>ぽう</sup>の<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>あ</sup>此<sup>こゝ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>  
何<sup>なに</sup>の<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>の<sup>あ</sup>成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>  
好<sup>この</sup>く<sup>く</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>あ</sup>女<sup>によ</sup>人<sup>にん</sup>を<sup>お</sup>息<sup>いき</sup>笑<sup>わら</sup>よ<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>あ</sup>  
上<sup>うへ</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>信<sup>しん</sup>作<sup>さく</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>の<sup>あ</sup>申<sup>まを</sup>は

かのえさる<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>日<sup>ひ</sup>哉<sup>や</sup>用<sup>よう</sup>の<sup>あ</sup>子<sup>し</sup>細<sup>さい</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>  
婦<sup>あ</sup>夫<sup>ふ</sup>下<sup>げ</sup>の<sup>あ</sup>男<sup>おとこ</sup>女<sup>によ</sup>とも<sup>も</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>信<sup>しん</sup>じ<sup>じ</sup>  
事<sup>こと</sup>ふ<sup>ふ</sup>ん<sup>ん</sup>。席<sup>せき</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>の<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>の<sup>あ</sup>度<sup>た</sup>申<sup>まを</sup>  
坐<sup>あ</sup>甲<sup>か</sup>子<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>日<sup>ひ</sup>男<sup>おとこ</sup>女<sup>によ</sup>こ<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>む<sup>む</sup>せ<sup>せ</sup>致<sup>ち</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>  
二<sup>ふた</sup>人<sup>にん</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>大<sup>だい</sup>毒<sup>どく</sup>ま<sup>ま</sup>え<sup>え</sup>年<sup>ねん</sup>を<sup>を</sup>よ<sup>よ</sup>め<sup>め</sup>令<sup>しん</sup>後<sup>ご</sup>  
く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>。病<sup>びやう</sup>者<sup>しや</sup>よ<sup>よ</sup>好<sup>この</sup>り<sup>り</sup>の<sup>あ</sup>若<sup>わ</sup>し<sup>し</sup>夜<sup>よ</sup>子<sup>し</sup>統<sup>とう</sup>  
定<sup>ぢやう</sup>り<sup>り</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>此<sup>こゝ</sup>子<sup>し</sup>一<sup>いつ</sup>生<sup>せい</sup>乃<sup>の</sup>る<sup>る</sup>。病<sup>びやう</sup>者<sup>しや</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>り



盗人の大悪人なりけり。びう〜よを倒ち  
ぐひや〜ぬ禍よていま。能く洗〜る有  
ぬく。日本よ〜く度申待のそ〜ゆり。天  
王寺とい。今ふ度申當あり。其縁起。  
宵より日待乃かく一夜か〜て居よ。堂の  
されども日待みか〜りて。ねがりのり  
若〜うらげ。中なるにむ〜ひ。一夜記

あう〜ひを業師如來乃清月證ふの  
まひ。甲子れなる。大黒天よ〜ひ。是も  
一夜か〜り。息災延命を祈〜ん。  
後がりのり〜新〜の〜は。夫婦れる  
らひ〜ひを後〜ゆ。大慈悲乃  
濟〜るに〜末〜れ人。教字子別  
よりあ〜る日乃〜ら〜る。よ〜る



をせしぬるもたつ。又鶴うへひぬまら。  
翌日れうも形うとていぬるも有是者  
理千似く非あり。女名れ。公り  
そむくさるるあまうしこ

九月九日

何と云々

北白殿

何言北國よりなる所貢物今も名

計あてさぬふり。指子れりひらり。  
丹波の國野勢といふ里あり。今に在  
り。またたえ此隣を食され。病は  
此のふを説侍といふ。あてられたる  
あて。人用より下され。残りけり  
遠り。は。病の時。あて。海を  
る。人。病。侍。寂。い。ま。女。も。あ。合



いふをよき人のうけしむはうきく落り  
 ぬるに國みたるの多うり昔れ賢れ  
 神のつらりのうをるるむを  
 今何んもあはるるこれあうめを  
 さしつらうきしむはうきく落り  
 ても好人のよき國の人の宜しめ  
 一幸あれ夫れうきく落り

免侍るはれうきく落り  
 来き聖人のよき國の人の宜しめ  
 せりむれはれうきく落り  
 物もえんこれたよれ多うり  
 人と宜しめたるはれうきく落り  
 とよるはれ。私るはれはれ  
 せ免すうきく落り



己が身をやめてかこ親なるのこいさ  
てふ人ものふあまの残るは家身  
れうやうやう心ざたに長にあり  
理ふもむめと残思るおろりやわ  
が息ひその歌し今乃母の女のゆまひ  
ふをえの好むをまらう給んをうあめ  
あほもいさめさあひのこ

去の暮月三日

宣旨

少将あゆ君

玄指は清祝結うらまの平され  
よし。一入めさうさひら。さあまの老  
のゆひもかこり侍るを候り。を  
ころき女を代法より。ぬ上の控  
所かぬにまら。たが。あれが平ひら



孝ありあるのきよ。末世の親と子に礼  
 みづれ。恩小別。心せぬ弱きて。親をぶ  
 敬ふ。のとも。昔も親をうやまふ  
 礼をうつ。君はつと。忠言ある  
 人。親をおろそかにする。君ふつ。ふ  
 られ。中を忘ま。老之。又嫁法。ひとて  
 縁りつ。さう。男姑ふつ。の事。

親お洗う。ふる。さ。は。る。も。古れ法あり。  
 女の位より。男は位界。さ。ふ。の。娘。を。は。は。  
 男姑。さ。う。や。ま。ぬ。女。の。礼。を。あ。ら。わ。す。  
 あれ。さ。え。末。世。の。姑。を。洗。う。ふ。の。は。男  
 姑。り。使。る。と。い。ふ。は。我。志。に。天。地。始。て  
 より。礼。を。背。く。人。の。恥。あ。ら。う。畜。類。と  
 同。く。ん。と。男。も。女。も。か。ら。う。の。ま。は。え。



人結好むなれたる已が形よおのれと迷ひく  
ひ我悔らんをたふまやぬ存み辨られん  
只こらも何れもあま心よ世の正路と  
義乃所きを男も女も上の島とて文  
ゆもこらゆりて終究賢

陽月二日

少乃尾

せんはの法をの

世乃中老ふ世年の民の樂法ありぬり  
雲井の庭よふひるの光共糸と云事  
六月申結却日にさむくあつたいのなる  
古のそやらむうひよとや法より出  
しえよとぬれさるの下のあもいんまねり  
なまむみそにのりもに教さつら位  
奉いひたつてらひに侍らんを以と



「ちんせき」  
考へてゐたさぬはく。せうが海へくはく。  
「しんせき」  
ひらきのひらきの顔と頼りて究うこ

霜月十日

小督

典侍とのら

「けんせき」  
あま〜ひらきさうれ後ゆ〜き柄  
「けんせき」  
の消息對面のこらひ〜の故  
「けんせき」  
をさすれせらる〜。貞個運ふに方

「けんせき」  
君玉々の民やらうた〜んえい。扱の新嘗  
「けんせき」  
系や〜の事。ま〜。此物指を神  
「けんせき」  
ま〜のあまの帝〜ら神饌を供せ  
「けんせき」  
ま〜のあま其始りの神代の上乃巻り  
「けんせき」  
天照名神乃當新嘗時を〜と有と  
「けんせき」  
世。唐も春も天子〜ら田〜ら  
「けんせき」  
ま〜の耕〜らあ〜ら民の



力<sup>ちから</sup>成<sup>なり</sup>産<sup>うみ</sup>あり。后<sup>ご</sup>も。美<sup>よ</sup>のそ。現<sup>あら</sup>る子<sup>こ</sup>日<sup>ひ</sup>  
を。志<sup>こころ</sup>を。あ。た。ま。ふ。神<sup>かみ</sup>供<sup>とも</sup>を。天<sup>あま</sup>子<sup>こ</sup>も。后<sup>ご</sup>も。その  
う。ら。ま。好<sup>この</sup>み。あ。ま。の。敬<sup>うやまい</sup>あ。ま。ま。あ。ま。の。代<sup>しろ</sup>下<sup>しも</sup>さ。ま  
れ。人<sup>ひと</sup>も。己<sup>おの</sup>が。陸<sup>つち</sup>を。行<sup>い</sup>く。代<sup>しろ</sup>系<sup>けい</sup>代<sup>しろ</sup>系<sup>けい</sup>う。我<sup>われ</sup>  
さ。は。る。の。識<sup>し</sup>の。あ。ま。の。我<sup>われ</sup>の。心<sup>こころ</sup>を。神<sup>かみ</sup>を。あ。ま。の。  
心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。感<sup>かん</sup>應<sup>おう</sup>も。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。  
天<sup>あま</sup>下<sup>か</sup>を。有<sup>あ</sup>つ。人<sup>ひと</sup>も。田<sup>い</sup>を。作<sup>つく</sup>り。野<sup>の</sup>食<sup>く</sup>を。あ。ま。の。  
四十二

夜<sup>よ</sup>食<sup>く</sup>れ。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。中<sup>なかつ</sup>に。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。  
う。ら。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。  
野<sup>の</sup>食<sup>く</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。  
世<sup>よ</sup>の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。  
ま。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。  
民<sup>たみ</sup>の。父<sup>ちち</sup>母<sup>はは</sup>の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。  
敬<sup>うやまい</sup>そ。と。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。あ。ま。の。心<sup>こころ</sup>を。



する業をとりぬれば心とちのり。留る人れ教多  
人を洗ふるぬれ心之衰へ一人のまづら結  
しむらひするに心し何れも善の事受  
て見せし知るべし。義を背れし益を  
理を背て念を起しし侍り。業も  
書しし。うらむるたふさそあまうしこ

嘉月十日

まげ

小づうれ法なり

来十九日。うらむるたふさそあまうしこ  
いねて。たふさそあまうしこ。二世れ仙の  
法名。我稱するたふさそあまうしこ。六根の罪滅  
ふらむる。家なるたふさそあまうしこ。を  
美れはさうぞく。何れれいさあまうしこ。を  
うらむる。いねて。たふさそあまうしこ。女乃



とぬれを品老たる世に若死と申沙汰を  
敷人よるを仙童のまゝかきしませ  
又完まるまゝあひ洗わしぬるの事あり  
かみ人からにまゝ。よくも、何くもつんえひ  
るひ。一係目小之物後様指つるまゝ  
と敷老の有り。たゞあり様と賞一の事を  
今より美りあるまゝに我の上をよるまゝいせぬ

よる人よりかづけ強ふを吾分見る甲斐  
ある様いゝまゝも世思ひの成とせ  
み事ありぬまゝにまゝかぬかたぬふ  
よる人より成まゝに世福とせぬら  
何みしとせ

臘月二日

河松翁殿

申洗



久遠なるものも、  
はるまねを、  
ひふも、  
も、  
さ、  
せ、  
梅、

赤くも、  
あ、  
美、  
由、  
て、  
名、  
田、



けりりめい赤色は書あり白ありい二  
 色あり海(深る成紅といはるるも  
 清淡との多む免は是を此書あり赤色  
 けりい二ありてせめ方をむらと  
 中いれもいりりこまひ貴人どれと  
 中ふられをゆるしいろと申はる。誰  
 もきる色にけい黄色は此法ありけりい

六乃二ありく深るを縞と申はれ  
 文もよふれ深るはるるは若苗色  
 色ありむりしより中深るを  
 色ありむりしより中深るを  
 被多たあふも法師よかつあふも女は  
 装束よえゆるきされども時色よあさる









小字  
蘇林  
婦  
義